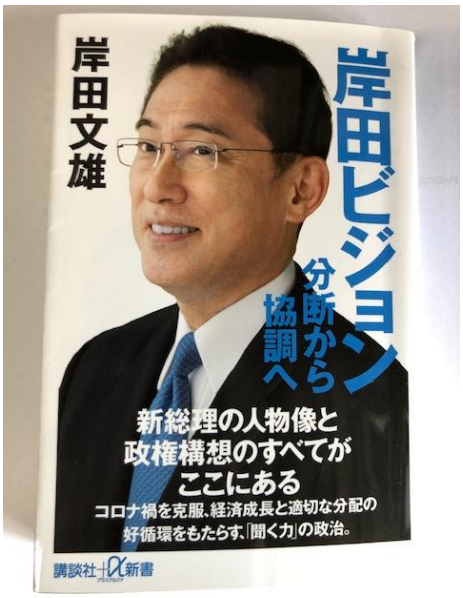
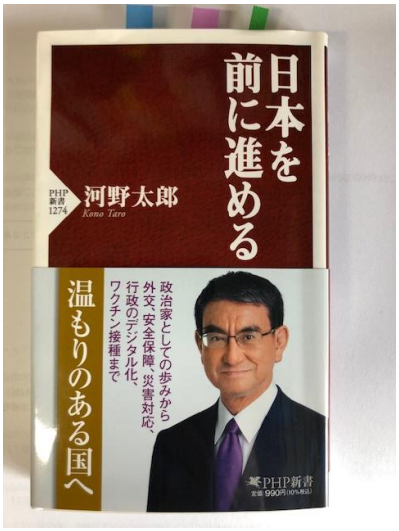
2021 年　記憶に残る本

１、「美しく、強く、成長する国へ。」　高市早苗著

2021 年の自民党総裁選に出た高市早苗氏の資質が良くわかる本だ。国家観と世界観・歴史観から個別具体的な政策に至るまできめ細かく網羅している。岸田文雄氏の「岸田ビジョン」と河野太郎氏の「日本を前に進める」を合わせて読むとその違いが良くわかる。

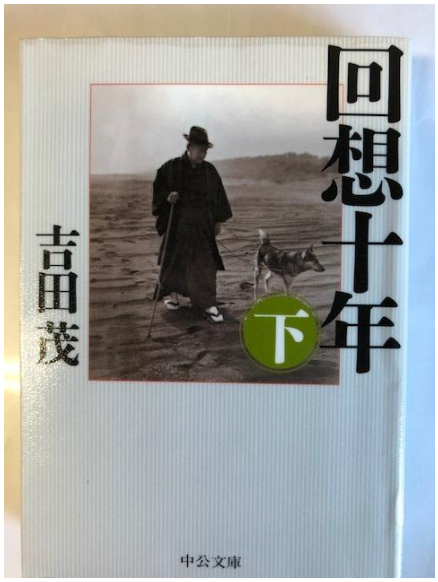
高市氏は序論で「日本人が大切にしてきた価値を再興するとともに、あらゆるリスクを最小化する為に先見性をもって対策を講じ・・・日本の安全と名誉を守る」と書いている。「日本人が大切にしてき価値とは、ご先祖様に感謝し、食べ物を大切にし、礼節と公益を守り、しんかり学び、勤勉人働くこと・・・」とわかりやすい解説で本質をついている。先祖を敬い名誉を守るところに著者の神髄が見える。いつか総理総裁になるだろうと予感させる名著である。





２、回想十年（上・下）　吉田茂著

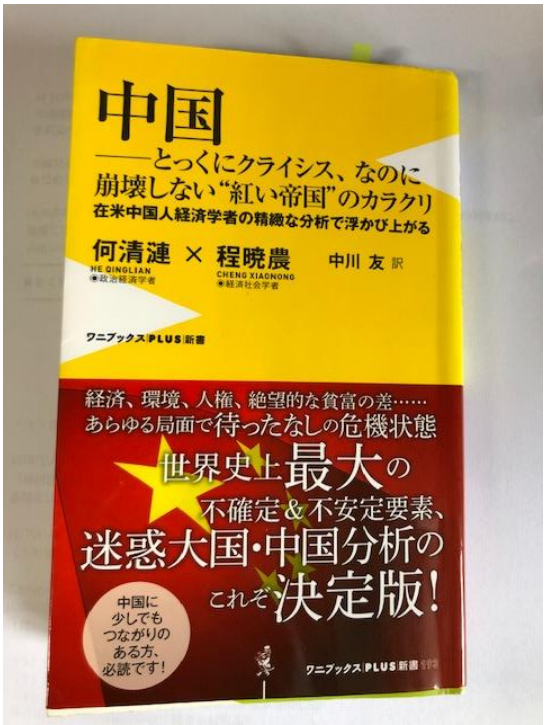
吉田茂は日米安保条約締結し経済復興の道筋を作った名総理だ。外務官僚で満州事変前の奉天総領事でもあった。その思想を探りたくこの本を読んだ。記憶に残る記述は以下の通りである。



28 章　わが国の進むべき道では、日英同盟の歴史的経緯や 1957 年の日米安保交渉で自由主義陣営とソ連共産陣営との二股主義を排する原則を貫いた点に共感した。また米国の占領政策は「史上稀な寛大にして恩恵的なものとなった」と述べている。

29 章　「わたしの皇室観」では歴史と伝統を尊重した思想が国益に適うと説いている。多くの先進君主国は民主主義国であることでわが国皇室と国民との関係が大事であると書いている。因みに回想十年は上・中・下と３巻ある。

３、「中国　とっくにクライシスなのに崩壊しない‘紅い帝国‘のカラクリ」
　何清漣×程暁農著　中川友訳



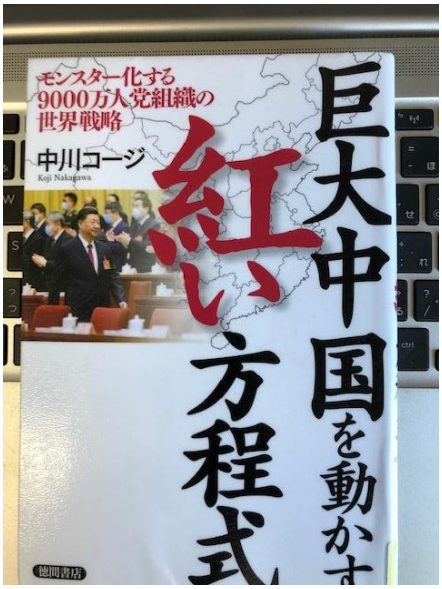
中国崩壊論についての本は 20 数年前から出ている。若干食傷気味である。これまでの議論・評論はそもそも定義からおかしい。よく対比されるソ連は 1989 年に崩壊したが、共産主義体制が消えて異なる体制に移ったことは事実なので「ソ連崩壊」は妥当といえるかもしれない。

著者は経済的衰退をクライシス（危機的）と判断している。しかし共産党政権は上手く経済運営して克服していると解説している。共産党指導部は、過去のソ連やカンボジアなどの共産主義政党の統治や米国や日本の経済危機に陥った失敗を教訓としてよく学び、対策を打っているので共産党体制は暫く続くと予測している。

しかしそれでもこの 10 年農村の貧困、都市部での失業、不動産に異常に依存した経済であることが明白となり、経済の衰退は数年前から確実に始まっていると解説する。

今年中国最大の不動産開発会社の恒大集団がデフォルトした。既に不動産バブルであることは明らかだ。経済危機は迫っているといえよう。著者は中国の経済学者からアメリカに亡命し、現在アメリカのシンクタンクの研究員で中国評論家である。

４、「巨大中国を動かす紅い方程式」　中川コージ著



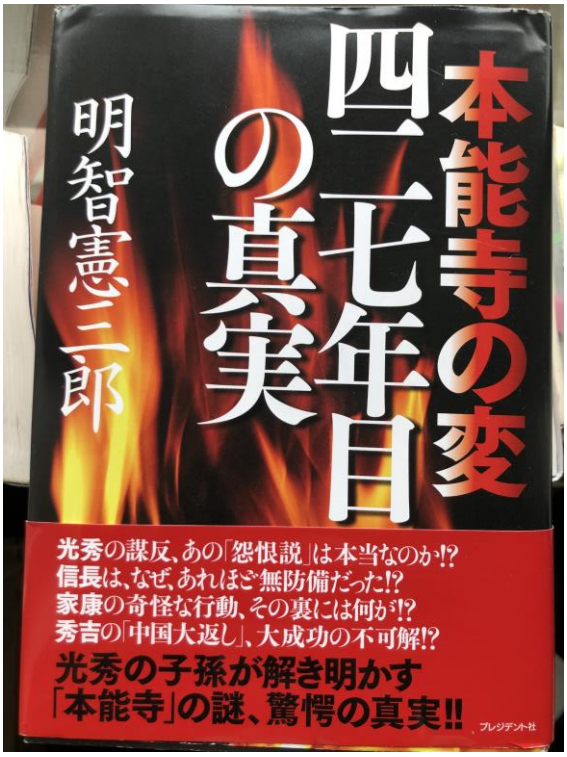
副題が、「モンスター9000 万人党組織の世界戦略」である。中川氏は北京大学博士課程を卒業し、英国留学もある若き俊英である。同氏は共産党組織を分析解剖して、以下のような見解を披露している。

中国共産党（以下 CCP）は、対米戦争は当面しないと強調する。その心は「闘いません　勝つまでは」ということだ。現状では軍事的にアメリカに勝てる状態にはないと判断しているそうだ。当面は大げさな言論と威嚇的な船と航空機により侵入で「脅す」戦略だ。広報宣伝と文化浸透工作で時間稼ぎをしている。

次に「党あって国家無し」で、国益より党益重視なのだと分析する。よって習政権のこの数年の対外行動も納得いくものだという。学習塾や AI 通信企業への締め付けは循環型経済体制（デカップリング）への移行と符合する。この 20 年不動産企業の野放図な拡大を放置してきたがどうやら制御するようだ。

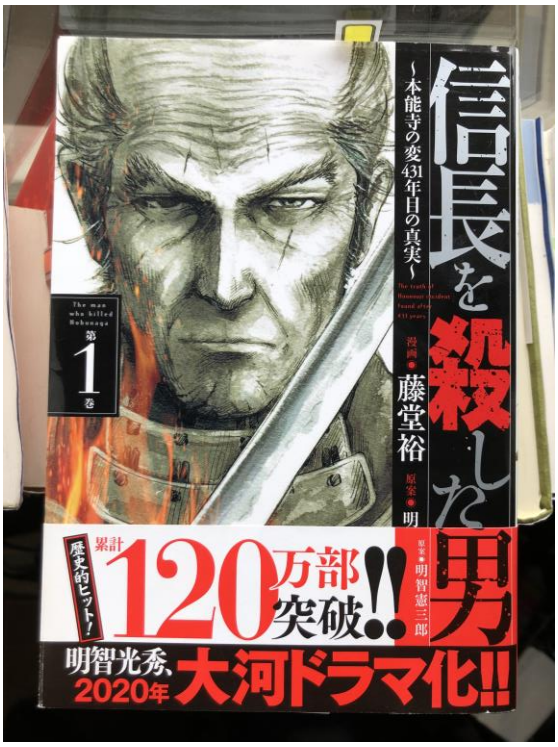
５、「本能寺の変　４３１年目の真実」完全版　2019 年出版　明智憲三郎著

2020 年の NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」であった。この本の著者とは小さな読書会で 2009 年「本能寺の変　427 年目の真実」の初版が出た頃お会いした。その時の記憶は著者が明智家の末裔であり、明智十兵衛光秀の真実を伝えることが自分の使命で、いつかＮＨＫの大河ドラマになることが目標だと述べていた。その意味で昨年は著者にとって記念すべき一年であったと思われる。



しかしドラマはこの本のストーリーを全面的に取り入れてはいない。むしろ一番の核心である光秀謀反の真相がドラマでは採用されていない。ただ怨恨・野望説だけで固められ逆臣としての明智光秀のイメージが随分変わったのではなかろうか。また「信長を殺した男」も 120 万部突破するベストセラーになった。

さてこの著者は、本能寺の変に関する通説を論理と資料から問題だらけであると批判する。私は著者の推理を支持したい。その根拠は通説と矛盾する事実がスペインやイタリアの教会に残されたキリスト教伝道師フロイスやウジヤーノの報告書などで発見されているからだ。そして通説は後の権力者（支配者）の都合で改竄や創作されているという冷厳な事実がある。著者の新説では、その後発見された事実と論理的に説明がつく内容になっている。なぜ信長は少数の部下だけで本能寺に泊まっていたのか？　なぜ信長は異変前日に家康を堺から京都に呼び出していたのか？



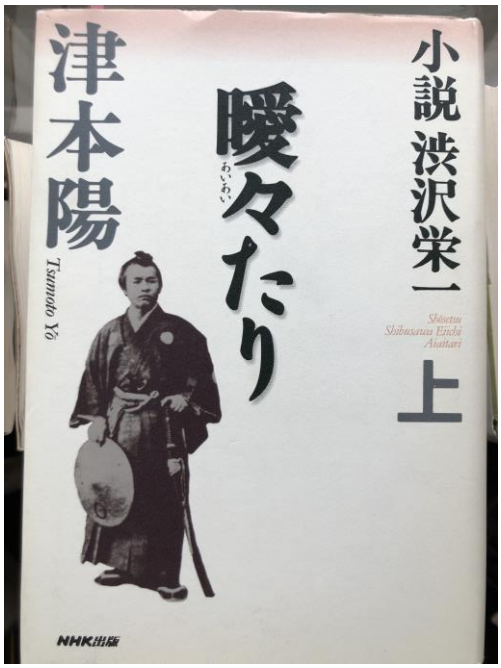
信長、光秀、秀吉、家康の真実の歴史を知ることは、現代人にとっても有益だ。偽りの歴史は誤った教訓を招く。なによりも「真実は小説より奇なり」ということだ。

６、「渋沢家三代」佐野眞一著、　「小説渋沢栄一(下)」津本陽著、
「論語と算盤（超訳）」　渋沢栄一著

2020 年度社団法人ディレクトフォースの企業ガバナンス部会の小研究会に参加した。テーマは「渋沢栄一の経営理念について」であった。研究会参加者に基本的知識を共有するために推薦された本があり、私はこの 3 冊を基本書として選んだ。

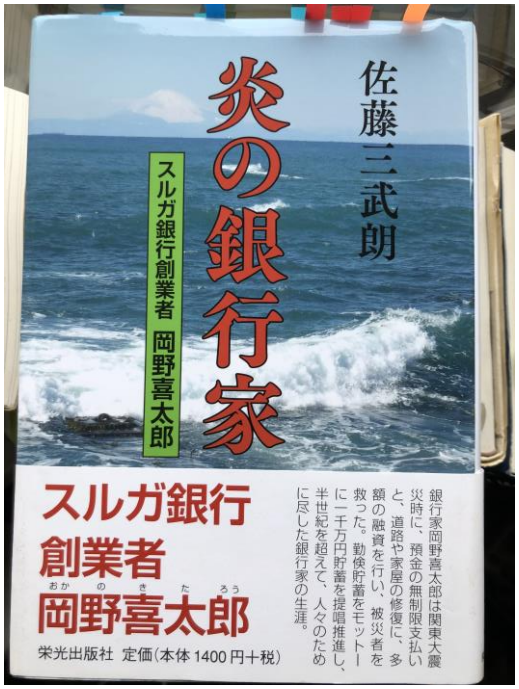
藍商家に生まれ、商才と武士の気概を持った青年が幕臣から紆余曲折を経て明治政府で大蔵官僚となり、日本最初の民間銀行頭取として活躍する渋沢栄一の生涯は痛快劇を読むようだった。彼の伝記から注目したのは徳川慶喜への報恩だった。それを契機に「渋沢栄一の民間外交」について深堀し、小論をディレクトフォースの研究成果としてまとめた。尚修正した小論は弊事務所 HP に掲載している。

渋沢栄一氏の鋭いところは米国と中国が次の時代の大国と認識していたことだ。その予想は 100 年後の現代まさに現実となった。尚渋沢とハワイの繋がりも面白いエピソードだ。



7、「炎の銀行家　スルガ銀行創業者　岡野喜太郎」
佐藤三武朗著

スルガ銀行の創業者物語である。地方銀行の現状には 20 年前から関心があり関連図書をいろいろ読んできた。スルガ銀行は 2018 年の不正融資事件発覚までは優良銀行だった。同行のリテールバンキング戦略はユニークなビジネスモデルで金融庁も不正事件前まで高く称賛していた。

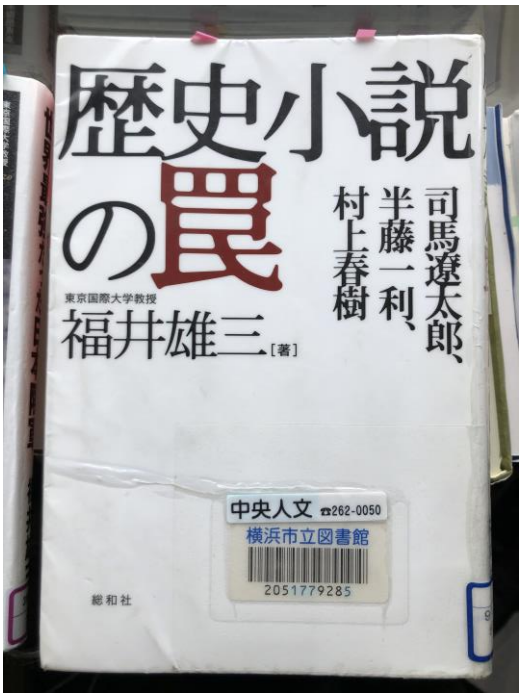


今年出版の「スルガ銀行カボチャの馬車の事件簿」（大下英治著）も面白かった。シェアハウスに関する貸出債権を担保不動産で相殺するという極めて珍しい債権処理を実現した。この処理を勝ち取った弁護士と債務者の戦いを描いたものだ。副題が「440 億円の借金帳消しを勝ち取った男たち」とある。スルガ銀行は 2019 年以降岡野一族が一掃され新経営陣に変わった。2020 年には神奈川地盤の電器量販店のノジマが大株主になった。今後の展開を注目したい。

さて岡野一族の繁栄は 140 年余で終った。2 冊を合わせて読むと平家物語の「祇園精舎の鐘の声、盛者必衰の理をあらわす」という有名な文句を思い出した。創業者の思いや倫理観を平成の子孫は忘れて目先の利益追求に走ったようだ。日本は世界で 100 年企業が一番多いそうだが、長期持続して成長することは企業にとって至難の技といえよう。

８、「歴史小説の罠　司馬遼太郎、半藤一利、村上春樹」　　福井雄三著

昨年父の遺品を整理していたところ、戦後間もない頃の日本国有鉄道入社用の履歴書を発見した。それに 1939 年 8 月 23 日～11 月 10 日まで満州国ハイラル（ノモンハンに近い都市）に滞在していたとの記載があった。ノモンハン事件の最中に現場にいたということだ。「ノモンハン事件では関東軍はソ連に完敗し、日本兵はほぼ玉砕した。そのため日本軍は南下作戦に転じ、英仏連合と激突した」という昭和史の通説を信じてきたので、父は幸運だったと認識していた。



しかしこの本で 1991 年のソ連崩壊後の情報公開と最新の研究で驚愕の真相が明らかになった。真実は 23 万ものソ連軍と日本軍 2 万が対戦し、結果ソ連軍は飛行機 1700 機墜落、戦車 800 両破壊され死者は 25 千余であった。他方日本軍の被害は飛行機 179 機、戦車 29 両、死者 17 千であった。当時ソ連軍の兵器は日本軍に比べ極めて劣っていたことや、スターリン独裁主義の不平不満から末端兵士の戦意が非常に低かったことが明らかになっている。

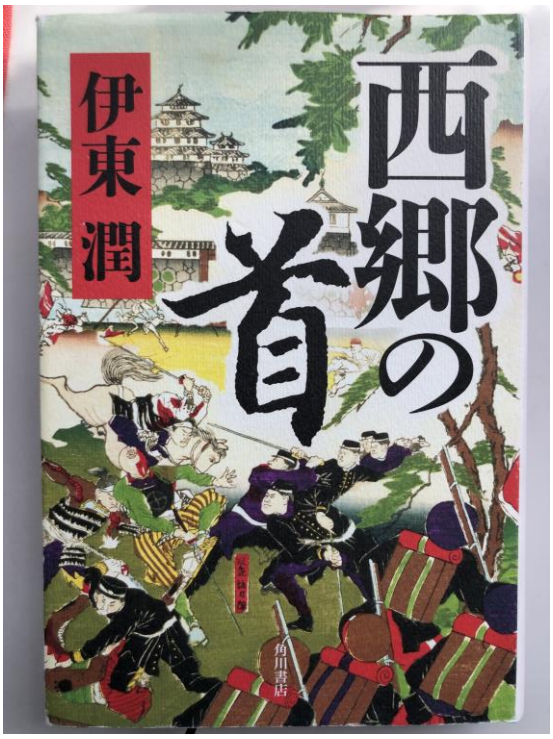
司馬遼太郎「坂の上の雲」や半藤一利を読んできた自分としてはコペルニクス的転換であった。司馬氏は亡くなる前にノモンハン事件を書けなかったのは残念だったと遺した。その遺言を半藤一利氏が引継ぐ形で 2001 年「ノモンハンの夏」を書いた。これは 23 版を重ねる超ベストセラーとなりその後不動の歴史通説となった。

しかし司馬氏や半藤氏もソ連の嘘の報道を鵜呑みにして小説を書いていたのだ。司馬史観と呼ばれる「明治は輝き、昭和は愚か」や「陸軍悪玉・海軍善玉」や「乃木希典愚将」論などの評価は当然改めるべきだろう。

スターリンはノモンハンとシンガポールでの日本軍の強さに恐れたそうだ。そのトラウマが終戦時のソ連参戦を遅らせ、北海道と東北がソ連軍に占領されずに済んだと著者は書いている。近現代史も新たな事実の発見で改訂されることが多い。いろいろ調べて考えてみるべきだと痛感した。

なお著者は東京国際大学教授である。

９、「西郷の首」　伊東潤著

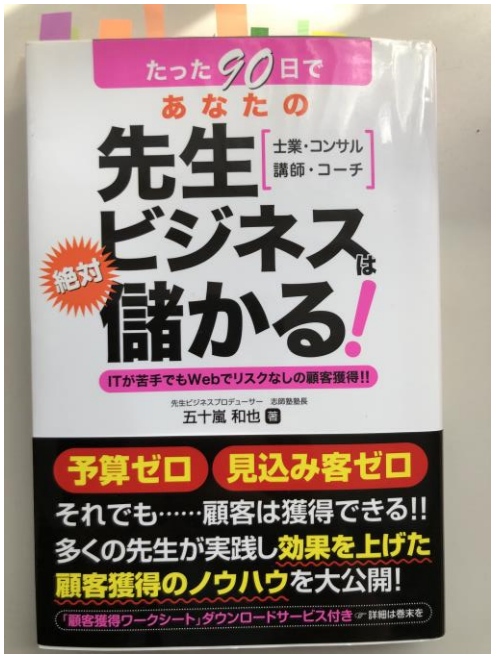


昨年 GoTo トラベルの支援金を活用して金沢に出かけた。40 年振りの金沢だった。兼六園周辺の美術館や歴史博物館見学で前田利家以来の加賀藩も江戸時代をなんとか生き抜いたことに気づいた。徳川時代の大大名として加賀前田藩と仙台伊達藩が有名だ。その参勤交代の大名行列は大変豪華で優雅であったそうだ。歴史博物館や兵器博物館も大変見応えがあった。

そこで前田藩に関する書籍を数冊買って読んでいた時、幕末の英雄「西郷隆盛」の首を見つけた男と「大久保利通」を暗殺した男は前田藩の下級武士で無二の親友であることが分かった。大変驚いた。それがこの「西郷の首」である。 幕末史を描く歴史小説の傑作と思う。司馬遼太郎が歴史に埋もれた「坂本竜馬」を世に出したように、伊東潤氏は全く無名であった「千田文次郎」という人物を歴史に登場させた。千田氏は日清戦争と日露戦争での功績から出世街道を歩いた。大正昭和時代には軍人として名門家系の祖となった。昭和の名将今井均大将は千田氏の娘と姻戚になっている。

2021 年上映の「流浪に剣心」や NHK 大河ドラマの「青天を衝け」とも同時代を描いており、合わせて鑑賞できたので一層面白かった。

10、「先生ビジネスは儲かる」　五十嵐和也著



著者は志師塾の創設者兼塾長であり、この本はコンサルタント稼業の教本である。「先生」とは弁護士会計士などの士族、コンサル、講師、コーチなどをさす。政治家も加えてもいいかもしれない。

自分は 2014 年から個人事務所を開業してきたが計画通りの成果はまだ出ていない。特に昨年はコロナ禍で収入がほぼゼロだった。これではいけないといろいろ検討していたところ、友人の紹介で「志師塾」無料セミナーを受講した。事前準備としてこの本の熟読と感想が宿題だった。

これまで沢山のコンサルで成功する類の本は読んだが、この本がベストと思う。もし常勤の仕事に就いていなければ志師塾の門下生になったかもしれない。多くのコンサルの陥り安い過ちを指摘して正しいやり方を教えている。儲かるとは「契約」を取れるということだ。「働きは最上の喜び」　勤労歓喜を信条として先生稼業を志す方々には良い道標になると思われる。